令和 6 年度　第 2 回　教育課程編成委員会議事録

日時：令和 7 年 3 月 28 日（金）20：00～20：58
場所：長崎医療技術専門学校　会議室
出席者：教育課程編成委員会 5 名：長尾　博，松本逸郎，小林小夜子，有福浩二、大坪　建
　　本校職員 6 名：淡野，韋，林，牧山，荒木，山内
記録：牧山

1. 校長挨拶

（淡野校長）令和 6 年度国家試験結果について、理学療法学科は 31 名受験し 30 名合格、作業療法学科は 20 名受験し 16 名合格。卒業判定会議では、明らかに合格が厳しいと考えられた学生もいたが、努力してきた経緯を考慮して全員の卒業を許可したため想定内結果ではあったが、最下位とされていた学生が合格するなど予想を覆す事例もあった。既卒者は理学療法 4 名、作業療法 1 名が受験し、全員合格。教員による継続的な支援が成果に繋がった。全国平均と比較しても良好な結果だったと判断。

入学者数については、今年度は両学科で合計 40 名と定員の半分程度で、全体在籍数は 167 名。定員充足率は 70%程度であり、次年度の募集数確保が課題。

次年度休学者ゼロという点は特徴的で、退学者はいたものの休学の対応はなかった。

2. 出席者紹介（自己紹介）

3. 開会

（韋）当委員会の第 6 条の規定により出席数を満たしているため、本委員会は適切に成立していることを報告。

４．委員長選出

（韋）委員長は淡野校長で進めさせていただく。

５．前回会議後の報告

（韋）広報誌 POTNurture（第 12 号）をもとに紹介。

６．審議事項：「過去 5 年間の医技専の取り組み」について

（林）会議資料に沿って説明と報告。

本校の五か年計画が 5 年を経過、令和 7 年度からは新たな計画に移行予定、教務に関する取り組みを中心に報告。

＜ICT やクラウドサービス導入＞

2019 年より ICT 導入を検討。2020 年のコロナ蔓延期に臨時休校となったが、直ちにオンライン授業を導入したため授業は 1 日も止めずに継続。

Apple TV 導入により、iPad とスクリーンの無線接続が可能になり、授業準備が効率化。

Google Classroom を導入し、授業資料や課題、小テストの配布・回収・管理を効率化。印刷業務が減り、資料はカラーでの提供が可能に。Google カレンダーにより、授業や行事予定・課題提出日などを共有し、リマインド機能も活用。教員間の業務や行事の可視化に貢献。Zoom による教員会議や、学生・実習指導者との遠隔面談も実施可能となった。効果や反応は良かった。

＜実習前評価（OSCE）の実施＞

診療参加型臨床実習への対応として、令和 4 年度から実習前評価を導入、チェックリストを活用。
OSCE（客観的臨床能力試験）を導入し、iPad で撮影・自己評価を促進。
実習後評価でのルーブリック評価を令和 6 年度より導入したことで評価基準が明確となり公平性が高まり、学生の努力目標が明確になった。今後もブラッシュアップしていく必要はある。
実習施設への情報提供を見直し、学生の特性や背景を共有することで指導がしやすくなった。

＜学習支援の工夫＞

学力の二極化に対応するため、学習支援を強化。
初学年次対象の「スキルアップデイ」を放課後から時間割内へ移行（令和 6 年度～）。毎週 1 回実施。2 年次には「ブラッシュアップデイ」として継続。教員の関わり方も「待つ姿勢」から「会いに行く姿勢」に変化。定期試験後の補習も教員は気合が入ってきた。雑談を交えた補習により、学生との関係性構築にも寄与。学生の学習習慣・探究心の形成に効果が見られている。

＜社会人基礎力育成＞

経済産業省が定義する「前に踏み出す力」「考える力」「チームで働く力」の 3 要素を教育に取り入れる。令和 7 年度からの教育目標として、「社会人基礎力を備えた人材の育成」を目指す。
入学初期にチェックリスト形式で自己評価を実施予定。社会人基礎力の理解を深めるための講義・評価を段階的に設計。文部科学省と厚生労働省の求める社会人像に差があり、そのギャップを埋める教育設計が課題。

【意見交換】

（松本）ルーブリック評価の運用に関し、得点の意味や運用方法について質問。
（林）総合評価の点数の合計は便宜的に用いており、本来は各項目に対するフィードバックが主目的。
（大坪）実習前・後の評価を学校で行っているのか。
（林）PT 学科が試しに教員間で行い今後ブラッシュアップや OT 科導入も考えていきたい。
（大坪）内容は学校ごとに異なるのか。
（林）ベースは同じだろうが、何を評価したいかは学校の特性が出ていると思う。
（小林）ルーブリック評価導入にあたって学生自身が自己評価することも成果につながると思う。指導者もだが学生自身もやってもらえるとよいのではないか。
（林）評価者がどういう視点でみるのか、判定がどういう意味か分かったうえで学生が取り組めるようにやっていきたい。
（有福）学校ごとで評価が違うが、実習を受ける側としては基準の統一はできないのか。
（林）大学や専門学校ではカリキュラムポリシーの違いが背景にあり完全統一は難しいが、基本とするところは PT では 7 年度の養成校の連携を作ることが目標である。
（長尾）大学ではルーブリック評価をアメリカから導入した経緯があるが、本来は教員ではなく個人評定を学生が行うものである。大学は自由度があり規制した枠は作らない、一方専門学校は何を学ぶか専門性がいるため個人評価プラス他者評価の 2 つを見る必要がある。
科目のセレクションで基礎科目とは何科目か。
（林）解剖学、生理学、運動学である。学習して努力したら点数の結果に現れることが統計でも効果が出ている。
（長尾）社会人基礎力は今やっていることとはかなり段差があるようで今後の大きな課題であると思う。

むしろ実習の中で身につけるのが望ましいのではないか。

（林）学生の特性をみられるように取り組みたく評価用紙にて可視化を考えていきたい。

（長尾）社会人になった卒業生の経過をみられたら効果が見えるのではないか。

（林）卒前卒後の教育が溝を感じるので円滑にラダーが踏めるよう、また卒後教育にも関われるように考えていきたい。

（松本）再試験に向かう対策がよかったと思う。

（林）担任に加えて他教員も関わることが効果的だったのではないか。しかし前期には夏休みを使えたが後期は時間が取れなかったのが反省である。手をかければ効果が出るのは実感している。後期は再試験までのスケジュールにゆとりを持たせることが重要だと考える。

（松本）答えを覚えるのみでなく、この問題は何を訊かれているのかわかる学びをしたらいいだろう。

（大坪）社会人基礎力とはという根本的な話を学生にもするのか。２年前に OT 職員に行ったことがある。若い世代は分らないので学校でも教えてほしい。

（林）話しても分からないので、チェックリストを使って前に踏み出す力としては何が必要かわかるように自己評価させていきたい。

７．総評

（淡野校長）５年間の振り返りでいろんなことが実施された。ルーブリックと社会人基礎力をみてみると、どこを目指し何をどうするのか示された方が分かりやすい。次の５年間にまとまった目標に向かうのでまたご指導いただきたい。

８．閉会

次回は令和 7 年 9 月 26 日（金）20 時から

９．謝辞